クレバーなマグロ

みどりい

私はクロマグロだ。黒潮に乗って日本近海へやってきたのは他でもない、人間を学ぶためだ。敵を知り、己を知れば百戦危うからず。そう、自分で言うのも何だが、私はマグロ一倍頭が良いのだ。クレバーなのだ。
そういう訳で私は、人間の世界へと向かった。

人間は正気ではないのだろう。私は陸に上がってそう思った。日の光は強すぎるし、水分は少なく乾燥している。第一、酸素が多すぎる。
聞いたところによると、人間は足が生えているらしい。なので、私も足を四本生やしてみた。我ながら満足の出来だ。どこからどう見ても人間だ。
熱い地面に跳び上がるようにして歩いていくと、やがての人間の女が一匹見えた。私が近づいていくと、彼女は私を見るなり
「マグロ……」
と呟いた。
しまった。
私は自分の失敗に気がつき、口をパクパクさせて戸惑うしかなかった。
人間は二本足か……

私にだって失敗はある。だが、私はクレバーだ。動揺などおくびにも出さず、彼女の言葉を否定する。
「お嬢さん。私はクロマグロではありませんよ」
彼女は訝しげに私の全身を見回した。
「でも……」
そんな彼女に、私は自信たっぷりにこう言う。
「マグロに足は生えていますか？」
「確かに……」
我ながら、鮮やかな手並み。自分で言うのも何だが、やはり私はクレバーなのだ。
そう、しみじみと考えていると、彼女が二本足で上手に歩いていこうとしているのが見えた。ので、呼び止めて、尋ねる。
「人はマグロをどうやって食べるのですか？」
私は、人間に捕まった我々がどのような道を辿るのか知る必要があると思った。
「いろいろありますけど……やっぱりお寿司がいいですよ。脂ののったトロはたまりませんね」
彼女は聞いてもいないのに〝オスシ〟とやらの素晴らしさを語り始めた。どうやら〝コメ〟という白い物体に〝ス〟というものを合わせ、そこに我々を切り刻んだものを載せて食すようだ。
なんて冒涜的なのだろうか。なんて悪魔的なのだろうか。

私は彼女に〝スシヤ〟の場所を教えてもらって礼を言うと、四本の足を駆る。陸の船よりも速く駆けた。

目の前は、地獄だった。

白いぶつぶつした塊の上に、海のあらゆる生命を細切れにしたものが載っている。そしてそれらが所狭しと身を寄せ合い、ガタガタと不気味に音をたてながら流れに乗せられてゆっくりと動き、そしてそれらは人間のいやらしい目に晒されていた。

私は愕然と立ち尽くして、口をパクパクさせる以外の術を持たなかった。

「何名様でしょうか？」

という声がして、

「一尾」

と返すのがやっとだった。

私はいつの間にか、私には恐ろしく座りづらい座席に横たわっていた。私はただ、人間のいう所のマグロの目で、肉塊が流れていくのを眺めていた。

「クロマグロ」

私ははっとして、私を見下ろす人間を見上げた。厳めしい顔の彼は唐突に私に掴みかかった。

私は時速160㎞で逃げ出した。海を目指して一目散に逃げ出した。灰色の陸を踏みしめて、光る波間を垣間見た。

海だ。

私は喜んで、正真正銘クロマグロに戻った。そして、熱い地面にべちゃりと落ちた。

しまった。海が見えただけであって、まだ海ではないのだ。

私はヒレを必死に動かして海へと、私の海へと向かう。が、それは果たされなかった。あの厳めしい顔の彼が私を抱き上げ、そのうちに私は気を失った。

私は、丁寧に丁寧に細切れにされて、大部分が白いぶつぶつの上に載せられた。私達はあの、不気味に動く謎の流れの上に乗せられて、人間の目に晒される。潮の流れならどれほど嬉しかったかと思わずにはいられない。

人間が私達にかける黒々とした塩気の強い液体は、海へ帰れない私達の最期への、人間なりの慈悲なのかもしれない。そう思うことにした。何かしらの理由をつけないと、何もかもが許せなかったのだ。

結局クレバーだった私達は、人間の何も分からないまま、人間のはらわたで踊る他ないのだ。